

# クリティカル・ソーシャルワーク実践の理論素描

田川 佳代子

## I. 本研究の目的

主としてカナダやオーストラリア、そしてイギリスで形成されてきたクリティカル・ソーシャルワークについて調べるのが本稿の目的である。クリティカル・ソーシャルワークは、これまでの伝統的なソーシャルワークにおいて志向されてきた統一的な体系モデルを探求するのとは趣を異にする。

Hick and Pozzuto (2005: ix)によれば、クリティカル・ソーシャルワークについての単一概念というものには存在しない。むしろクリティカルな視座は数多くあれども、それらは「クリティカル」とは称さず、それぞれに構造的、ラディカル、進歩的、また反抑圧的などと多様な名称をもつ。

Healy (2005: 220)によれば、1980年代から1990年代にかけて、クリティカル・ソーシャルワーカーらは、構造的ソーシャルワーク、反抑圧的または反差別的アプローチを表明しながら実践モデルを発展させてきた。

ソーシャルワークにおいてクリティカルな視座を高める実践として、次の著者と概念が知られている。Ife (1997)の「クリティカル実践」、Pease and Fook (1999)の「ポストモダン・クリティカル視座」、Thompson (2006)の「反差別的実践」、Baines (2007)の「反抑圧的实践」、Mullaly (2007)の「構造的ソーシャルワーク」、Ferguson (2008)のラディカル・ソーシャルワーク (Briskman, Pease and Allan 2009: 4)。

Briskman, Pease and Allan (2009: 7)は、クリティカル・ソーシャルワークを単一のモデルと考えることについては反対の立場に立つ。上記に挙げたクリティカル実践以外に、Fook (2002), Davies and Leonard (2004), Healy (2005), Hick et al. (2005), McDonald (2006), Ife (2008)による最近

のクリティカル・ソーシャルワーク実践の理論を理解し、対話し続けることを求めている。

Cambell and Baikie (2012: 78)は、クリティカル・ソーシャルワークを現実「適用する」一連の理論と捉えるのではなく、ソーシャルワークにクリティカルな視座をもたらす、いわゆる世界と我々自身と生き方に関する考え方や態度の枠組みであり、包括的な信念体系として捉える。

クリティカルな視座は、伝統的なソーシャルワークとどこがどのように異なるのだろうか。また、実践においてその違いはどのように現れるのだろうか。クリティカル・ソーシャルワークの疑問に対し答えを見つけながら、クリティカル・ソーシャルワーク実践の理論を素描し、ソーシャルワークの脈絡においてクリティカル・ソーシャルワークのミッションがどう実践されるのか、実践の理論のアウトラインを描くことが本稿の課題となる。本研究は、クリティカルな視座に基づいたソーシャルワーク実践を促し、またクリティカルな実践を促しうる理論としてクリティカル・ソーシャルワークを探究する。

本稿の構成を次に述べる。初めに、「クリティカル」の用語について、批判理論からの援用であること、批判理論とクリティカル・ソーシャルワークの関連性について調べる。次に、批判理論の特徴とクリティカル・ソーシャルワークの志向性の関係について調べる。さらに、日本のソーシャルワークが置かれている社会的状況について記述する。クリティカル・ソーシャルワークのミッションと、ソーシャルワークが埋め込まれている文脈にある反駁とどう向き合うのかについて調べ記述する。そこから、クリティカル・ソーシャルワークの実践が、主流のソーシャルワークとどう異なるのか、調べその違い

を明らかにする。最後に、クリティカル実践の理論的検討の意義について述べ、まとめとしたい。

## II. 批判理論からの援用

辞書で「クリティカル」の意味を調べると、批評、批判的な、危機の、きわどい、重大な、決定的な、と書かれる。これらの意味とクリティカル・ソーシャルワークの「クリティカル」とは特に関連はない。

クリティカル・ソーシャルワークの「クリティカル」は、批判理論からこの用語を借用している。批判理論はドイツの社会思想家「フランクフルト学派」から進化した社会学や哲学の理論である。「フランクフルト学派」は西洋マルクス主義学派であり、マルクーゼ、ハバーマス、アドルノ、フロム、ホルクハイマーらに拠る (Hick and Pozzuto 2005: xi; Briskman, Pease and Allan 2009: 4; Alway 1995: 2)。

近代マルクス主義は、人々の意識に対する支配的イデオロギーの影響を省みなかった点を批判されてきた。これに対し批判理論は、主体性 *subjectivity* の理解とマルクス主義の要素を統合しようとしてきた。特に、人々の *agency* の重要性、すなわち、社会変革の過程に積極的に参与する人々の主体的な能力が評価し直された (Always 1995: 2)。

批判理論は、支配的なイデオロギーや思考様式が、社会制度と同じく、人々の生活にどう影響するかについての省察とともに、人々の生活と社会・政治的脈絡の構造的焦点との関連性を分析する (Briskman, Pease and Allan 2009: 5)。

批判理論は、閉じたシステムではないので、時代の変化とともに概念の見直しがなされる。同様に、ソーシャルワークにおける「クリティカル」の概念も変わりうる。クリティカル・ソーシャルワークの視座において「もはや厳密に批判理論と緊密な提携関係にはない」 (Hick and Pozzuto 2005: xi) といわれる。しかし他方で、批判理論がクリティカル・ソーシャルワーク実践の基礎をなす (Briskman, Pease and Allan 2009: 4) ということは事実であり、主流のソーシャルワークとの差異の理論的根拠を与える。

## III. 批判理論の特徴とソーシャルワークの志向性

ソーシャルワーカーの知識基盤は、実践の知恵から引き出される。ソーシャルワークの現場では、従属や抑圧、人種差別主義や構造的不利益の影響を目撃すること

が少なくない (Briskman, Pease and Allan 2009: 9)。それを当然視するやり方に異議を唱えるかどうかは、状況を変える期待可能性と、キーマン・アクターとして行動する意志と判断による。

批判理論は、実践的意図をもつ理論として洗練されてきた。Always (1995: 2) によれば、実践的意図をもつ理論とは、世界を理解しようとするのみでなく、それを換えようとするものである。理論の実践的意図は、世界を変える志向性であり、解放のビジョンを表す。ビジョンには2つの要素がある。1つは、よりよい世界の概念、すなわち、どんな世界がありえるのか、また、あるべきか。より良い世界の実現は、実践的な意図を伴う理論の目的となる。2つ目の要素は、どうしたらその世界が実現できるかというものである。社会的行為者の意図の行動が、変化のダイナミクスと方向性を決める際に役割を果たす。解放のビジョンは、行為者 *agents* と行動 *actions* に関心があるが、先の2つの要素は *agents* と *actions* を明確にするものとなる。

批判理論の知識は、能動的、社会的に構築され解釈される。客観性とは神話であるともいわれ、「真実」は「正しい」として特定の解釈を定める権力を握る者に決定づけられる。

批判的社会理論の特徴の一つは、実証主義に反対の立場をとることである (Agger 1998: 4)。Agger (1998: 4-5) によれば、知識は単に「そこにある」という内界の反射ではなく、探究する世界について一定の仮定を形づくる科学者や理論家の能動的な構築であり、厳密に価値自由ではない。社会は歴史性 (変化に対する感受性) をおびたものと理解され、科学によって社会の自然法則が記述されるという実証主義の概念に反対する立場である。

批判理論は、伝統的に主流の社会理論、哲学、科学に対し批判とオルタナティブを与え、抑圧された人々の解放に関心がある (Mullaly 2007: 108)。

Agger (1998: 4-5) の社会的批判理論は、支配、搾取、抑圧のある過去と現在、そしてこれらを取り除きうる未来を区別し、政治・社会活動を通じた進歩の可能性を保証する。理論の役割は、現在の抑圧について意識を高め、質的に異なる未来社会の可能性を証明することにある。社会変革に参加するという意味で政治的であるけれども、支配が構造的であるという洞察と分析を与える。人々の生活に及ぼされる政治、経済、文化、ディスコース、ジェンダー、人種に関する社会制度の影響と抑圧を理解することができるよう、その根源を照射する。

クリティカル・ソーシャルワークでは、すべての人に一つの同じ現実があるとは考えない。現実をどう理解す

るかは、個々人の経験と人々がどこでどのように社会、文化、政治的状况に埋め込まれているかによる (Cambell and Baikie 2012: 72)。

実践的意図、世界を変える志向性、解放のビジョン、よりよい世界の概念とそれをどう実現するかの考え、これらの要素によって明確にされる agents と actions の主体性と創造性。これらの知識を構成する批判理論を、ソーシャルワーカーはどう実践で援用するのか。

たとえば、Healy (2005: 219-220) は、クリティカル・ソーシャルワークを、次の志向性を共有する広範なソーシャルワーク・アプローチと理解する。

- ①構造的な社会的過程、特に、階級、ジェンダー、障害、セクシュアリティに関連して社会的サービスを利用する人々に経験される社会的抑圧に対し貢献する。
- ②ソーシャルワーク実践と政策の過程における反駁する結果についての批判的自己省察の見解をもつ。
- ③政策策定、直接サービスの分配、ソーシャルワーク教育における権威主義的な関係ではなくむしろ共同参加に力を尽くす。
- ④進歩的な社会変革に向け、抑圧されている人々と共に、彼らのために働くことにコミットメントする。

また Hick and Pozzuto (2005: ix) によれば、クリティカル・ソーシャルワークの理論的視座は、構造的諸理論、フェミニストの諸理論、現象学、社会構成主義、ポストモダニズム、ポスト構造主義、ポスト植民地主義などを包含する。そのレベルや強調は同じではないが、クリティカル・ソーシャルワークと現代社会の状況を理解するのに役立つ。

Cambell and Baikie (2012: 72) も同様に、クリティカル・ソーシャルワークの基礎的な仮定には、モダニスト (反植民地を含む)、ポスト構造主義者、ポスト植民地主義者、ポストモダニストの思想が混在し、それぞれの思想学派における概念の再概念化の変化とともに、一般性や共通性があると考えられる。

本稿では、それらの理論的視座の一つ一つを検討することはできないが、批判理論は、統合された理論的視座を意味するというよりは、多様な異なる理論的立場を包含する (Briskman, Pease and Allan 2009: 4)。このことは抑圧の一形態についてのみ傾注するというのではなく、多様な抑圧の形態と同盟し連帯することを示唆する。クリティカル・ソーシャルワークは、多様な視座の交差点で行われる実践として描くことができる。

#### IV. ソーシャルワーク実践の脈絡

今日の日本の状況に目を転じると、社会保障のビジョンに関する議論は進展せず、政府の財政再建という目的を前面に出す消費増税関連法案が、民主、自民、公明の3党の合意の下、2012年に成立し、来年度4月引き上げを行うという政治的判断が示された。民主党政権下での年少扶養控除の廃止、震災復興のための復興増税の所得税額上乘せ、また2004年の年金制度改正において厚生年金及び国民年金の保険料が2017年まで毎年段階的に引き上げられることが決められている。介護保険も後期高齢者医療も、給付の増加とともに保険料負担が増加する仕組みである。働き盛り世代の負担増と収入減が見込まれる。そして、自民政権は、生活保護費の減額の計画を進めた。今後さらに富裕層と貧困層の格差の拡大、社会的に排除され不利益を被る人々のさらなる状態の悪化が懸念される。

大沢 (2007: 71) は、「グローバル化や少子高齢化に代表される社会・経済の構造変化がいちじるしいにもかかわらず、日本の生活保障システムは再構築されず、従来型のまま作動することによって、かえって安心を損なうという『逆機能』を起すにいたっている」と指摘する。阿部 (2008: 96) もまた、「社会保障制度や税制度によって、日本の子どもの貧困率は悪化している」(96)と訴える。

東日本大震災をきっかけに無料の電話相談「よりそいホットライン」を始めた熊坂義裕氏は、社会的包摂サポートセンターを立ち上げ、被災地の人たちのあらゆる相談を受け付ける。アクセスは2万件以上、多い日は4万件を超えるが、一日1200件程度しか対応できない。内容は生活苦から病気、家庭内暴力、自殺念慮と様々で、自立が困難な人たちへの個別支援が細る実態を指摘する。この状況から「税と社会保障の一体改革」を見据え、経済優先でない、生活に根差した政治の気づきの必要性を指摘する (朝日新聞2013年7月13日オピニオン2013参院選、日本の現在地①、熊坂義裕さん「優しさの保守政治、どこに」)。

市場経済と最小限の政府介入のイデオロギーが幅をきかず政策の下で、社会のなかで最も脆弱な構成員への影響がある。例えば、釜ヶ崎の日雇い労働者・ホームレスの結核罹患率の高さや、越冬活動中に発見される路上死のように、グローバル社会における貧困撲滅や人権への合意があるにもかかわらず、日本のローカルな特定地域の貧困には無関心や無視が常態化している。その状況を少しでも変えるビジョンをもって、健康診断、医療支

援、就労支援、子どもの夜回りを含む地域活動支援、炊き出しの継続が行われている。

## V. クリティカル・ソーシャルワークの ミッション

クリティカル・ソーシャルワークの核となるミッションは、実践と政策策定における社会正義を高めることである (Healy 2005)。保守主義や新自由主義、経営管理主義を信奉する支持者からの挑戦に対して、構造的な抑圧の分析や、協働アプローチによるアクションを優先する実践理論を備える。

Rossiter, A. B. (1996: 23) も、社会正義に基づくソーシャルワーク理論と実践の必要性を訴え、ポスト構造主義と批判理論からクリティカル・ソーシャルワーク実践のオルタナティブな視座を導き出す。

ソーシャルワークは、人権と社会正義を基本に据える実践原理を備える。この実践原理に支えられた倫理綱領により、保守的な実践環境においても、人権を支持し不公正に挑むことが期待される。その意味で専門職そのものに反駁を内包している。

しかし、現実のソーシャルワーカーの多くは、実際、個人の変化と同じ程度に社会の変化に関心をもちコミットメントしているわけではない。その点で、「クリティカル」とはいえない。翻れば、クリティカル・ソーシャルワークが、これまで主流のソーシャルワークに重要な影響を与えてこなかったということ、ソーシャルワーカーがクリティカルな意図や解放のビジョンをもつ組織に雇用されるという期待も難しいことがある (Briskman, Pease and Allan 2009: 3)。

ソーシャルワーカーは、支配的なイデオロギーに統治された政策の範囲で働く。これらの政策は日々のソーシャルワーク実践の現実世界とはほとんどつながりのない人々によって決定される。優勢なパラダイムの支配に抵抗することは、政治的実践に携わることを意味するが、それはソーシャルワーク教育や研修には含まれず、雇用組織によっては禁止されている。

ソーシャルワーカーは、敵対的な環境 (Ife 1997: 12, Fook 2002: 161) に埋め込まれながら、どう実践するのか。

Fook (2002: 161-2) は、実践を「どんな文脈であろうとその脈絡と共に働くこと」と定義する。環境を敵対的であると認識するならば、これを変えるために働く。焦点はその環境や局面を変えることであり、実践を環境と共に働くこととして枠づけ直す。我われも文脈の一部と

みなされる。その文脈の諸側面に対し責任をもつのは我われ自身である。我われとは広範な脈絡において異なる微視的風土を創造する変化の可能性を知る者とされる。

Cambell and Baikie (2017: 78) は、クリティカルの視座に依拠しながら、「主流」の脈絡で実践することは可能であると述べる。日常の仕事のなかで、社会正義を高め、クリティカルの潜在性を開拓し、実践を政治化する可能性があるとして述べる。

Ife (1997: 175) は、ソーシャルワークを、福祉国家の複雑で反駁のある脈絡に位置づけられる複雑かつ反駁のある活動と捉える。「どのようにするか」に対するような単純な答えはないとしながらも、クリティカル・ソーシャルワーク実践を発展させる可能性の領域を明示している。

今日のサービス提供組織に関連する制度改革は、クリティカルな実践の可能性を狭め、ソーシャルワーカーのクリティカルな関与を抑制するが、Healy (2005: 220) は、クリティカルな視座の必要性が無くなったわけではないと指摘する。

日本の例を挙げると、例えば、貧困は公的な社会問題であるが、最近、NPOなどの民間の取り組みによるホームレス支援が成果をあげる一方で、他方では、貧困ビジネスと呼ばれる生活保護費の搾取問題が訴訟事件として取り扱われる事態が生じている。規制緩和と民営化を推進するポスト福祉国家の改革は、人権と社会正義の使命に対する専門職の責任や責務の担保なしでは、援助関係の非対称的な力関係も加わり、人権が脅かされる侵害の恐れがある。

また、最近の医療改革において限られた医療資源の効率的分配を強力に推し進める施策の圧力の下、病院の医療ソーシャルワーカーの役割が患者のニーズを中心とする支援というよりは、病院組織の医療チームで選ばれた目標に貢献する役割が優先される。社会的・組織の状況に埋め込まれたなかで実践は規定される。医療チームの目標にそぐわないクライアントのニーズはどこにも誰にも受け止められることなく沈潜していく。しかし、クライアントのもつ問題は、クリニカルな臨床的諸問題といえども、それは極めてクリティカルな政治的諸問題でもある。個人の諸問題を私的な諸問題に帰して終わる相談援助ではなく、むしろ個人の主観的な現実を通してとらえ返される客観的事実としての社会的な諸問題を分析し、問題の解消を図るソーシャルワーク実践が必要とされている。

Ife (1997: 178) は、ソーシャルワークを本質的にラディカルであると認識する。彼は、ラディカル・ソーシャル

ワークを専門職の周辺から中心へ引き込み、固有のラディカルズムをソーシャルワーク実践の主流に組み込むソーシャルワークの概念化を主張する。「ラディカル」という言葉のかわりに、「クリティカル」や「オルタナティブ」の用語が用いられるのは、オルタナティブな実践アプローチの周辺化を避けるためといわれる (Ife 1997: 175)。

では、クリティカル・ソーシャルワークは実際どのような実践であるのか、次に調べる。

## VI. クリティカル・ソーシャルワークの実践

クリティカル・ソーシャルワークの実践は、主流のソーシャルワークとは異なる仮定に基づく。主流のソーシャルワークは、Baines (2007: 4) によれば、次のように定義される。

主流のソーシャルワークは、クライアントや抑圧された共同体、そして社会正義の問題というよりも、専門職主義、職業経歴の上昇、職場の権限と同一化するソーシャルワークをいう。主流のソーシャルワークは、社会的諸問題を個人の欠点（不十分な個所）、病理、不適當を強調し、非政治化される方法で社会的諸問題をみる傾向をもつ。介入方法は、権力や構造、社会関係、文化、経済力の分析に挑む意図は持たず、個人に照準が定められる (Baines 2007: 4)。

特に、非政治化は次のように定義される。政治の意味は、我々が日常生活で用いる政党政治や政治家のイメージとは異なる。それはものの見方、捉え方、とり扱い方にかかわる。

非政治化とは、社会変革をしようとする人々と諸問題を統制するため、諸問題から政治と政治的気づきを外す過程をいう。実際、中立であるものはなにもない。生活の中に政治の免除される領域はない。すべてが、権力、資源、肯定的アイデンティティへの闘争を求める。ソーシャルワークにおいて諸問題は、個人的な欠点、医療や精神医学的診断、犯罪行動、その他の逸脱として定義されることにより、もしくは、社会的諸問題やそれらの解決について既存の官僚的理解を使用することによって、非政治化される (Baines 2007: 5)。

主流のソーシャルワークという以外に、伝統的なソーシャルワークと呼ばれる。ソーシャルワーク理論の分析

を示した Howe (1987) や Whittington and Holland (1985) による概念図では、水平線の両極左右に主観性と客観性、垂直線の両極上下にラディカル・チェンジ理論とレギュレーション理論を定め4象限とし、そこで伝統的なソーシャルワークは、客観性とレギュレーション理論の象限で「固定者」と名付けられる (Payne 1997: 64)。

主流のソーシャルワークの定義に対し、クリティカル・ソーシャルワークはどのように異なるのか。Cambell and Baikie (2017) の論文「クリティカル・ソーシャルワークの探求、始める最初に」では、次のようにクリティカル・ソーシャルワークは記述されている。

**クリティカル・ソーシャルワークの仮定** 人間は流動的、柔順、多元的な影響を受けやすいと理解される。個人的アイデンティティと集合的アイデンティティの発達において社会関係が重要とみられる。個人的アイデンティティ（我われが自らをどうみるか）は、我われの社会的位置取りとアイデンティティ（他者が我われをどうみるか）によって影響される。社会的アイデンティティの人種、文化、民族、年齢、ジェンダー、性的指向、宗教、能力、階級は、日々の生活の実体的現実であり、差異と抑圧、支配、特権を導くが、決定論を受け入れていない。むしろ、人間は自らの生活と社会の形成に能動的に関わると理解される。クリティカル・ソーシャルワークでは、不正義への抵抗と変換に関する政治的仮定をもつ。ソーシャルワーカーは、よりよい社会的世界を想像し構築する困難と創造に携わる責任があると仮定される (Cambell and Baikie 2017: 72)。

**クリティカル・ソーシャルワークの価値** クリティカル・ソーシャルワークは、公平、公正と平等、コミュニティ、包括性、民主制、多様性と差異の賞揚、人権、社会正義、持続性、調和、協働、独立、人と社会の変換（トランスフォーメーション）の価値に基づく。これらの価値は「非クリティカル」の構成員によっても支持されるので、それらを「クリティカル」にするために、前もって文脈の過程にこれらの価値を埋め込むことが問われる (Cambell and Baikie 2017: 73)。

**クリティカル・ソーシャルワークの理論** クリティカル・ソーシャルワークの理論は、基本的に社会学、人類学、政治学、教育学に依拠する。これには伝統的なソーシャルワークに含まれる生物医学や心理学は含めない (Cambell and Baikie 2017: 73)。

**クリティカル・ソーシャルワークの概念** クリティカル・ソーシャルワークの概念として次のものがある。抑圧、支配、特権、個人的アイデンティティ、社会的ア

アイデンティティ、個別化、正義・不正義、人権、社会的場所、社会的位置取り、権力、言語、ディスコース、対話、対話的關係、歴史、差異と多様性、包摂と排除、周辺化、複雑性、反駁、批判的省察分析、援助、意識向上、共同体、脱構築・再構築、脈絡、意味、可能性 (Cambell and Baikie 2017: 74)。これらの概念の1つ1つを本稿でとり扱うことはできないが、クリティカル・ソーシャルワークの構成要素として改めて検討する。

クリティカル・ソーシャルワークの原理 クリティカル・ソーシャルワークの視座を採用する者が取り組むべき実践は、Cambell and Baikie (2017) によれば、次の原理に基づく。

- ㉑ 仮定、価値、理論、概念、原理、実践の一貫性を達成する。
- ㉒ 個人/私的な諸問題を公的/政治的諸条件とつなげる。仕事を政治化することによって、社会的諸問題の優勢な定義を枠づけ直す。
- ㉓ 標準化された知識や実践を捨てるのではなく、実践の文脈化されている特性を理解し、文脈に関わる権力を含め、行動を変える。これは「クライアント」から、問題のある「文脈」へと実践の焦点を移すことを意味する。
- ㉔ 多層的なレベルで働く。ソーシャルワークは個人、家族、共同体と直接的に働く。また、政策、研究、アドボカシーのレベルでも働く。
- ㉕ 伝統的に周辺化されている人々の声と経験を中心におく。
- ㉖ サービスを利用する人々と共同体の知識や経験に価値をおく方法で協働し、集まりとして動く。
- ㉗ 生活のすべての要素、物質的、情緒的、認知的、霊的要素に留意する。
- ㉘ 個人、集団、地域の独自性を尊重する倫理的関係性を確立し維持する。
- ㉙ 反駁と不確かさの渦中にあってもすっきりと有能に働く。
- ㉚ 批判的省察をしながら実践する (Cambell and Baikie 2017: 74-5)。

上記の原理は、先に示した Healy (2005: 219-220) によるクリティカル・ソーシャルワークの志向性と同じ方向性である。すなわち、①階級、ジェンダー、障害、セクシュアリティに関連する社会的抑圧に関わること。②批判的自己省察の見解をもつこと。③共同参加の関係を築くこと。④社会変革に向けて抑圧されている人々と共

に、彼らのために働くこと。

上記の原理の㉑㉒は、Ife (1997: 183) の、周辺化された人々の発言権を合法的、正当なものにする実践と相通ずる。つまり、周辺化された人々が自らのニーズを自分で定義し、ニーズを満たすように助ける、ソーシャルワーカーのエンパワメントの役割である。

周辺化された人々の声を代弁するワーカーの発言は、周辺化された人々の意見よりも聞き届けられやすい。そうした権利擁護は、周辺化された人々の無力化を強め、ソーシャルワーカーの存在が他の権力集団と等しく映ることもある。ある一人の日系ペルー人の女性は、日本人から日系人移民として扱われ、援助の対象者と規定される社会関係がいかにも自らをディスパワーするかを語り、自己のアイデンティティを規定し直す関係を要求した。これはソーシャルワーカーに、上記の原理の㉑㉒を求めることとつながる。

Ife (1997: 199) は、不利な立場にある人々がソーシャルワーカーの教育を構成する中心的役割をもつと考える。ソーシャルワークはイデオロギー的に中立であると言われるけれども、本質的に、ソーシャルワークはイデオロギー的活動であり、政治的実践であると定義される。

Freire (1972) は、問題を明確化し解決する過程で他者と接点をもつことは、意識を高める力強い経験、エンパワメントの基礎となるという。問題を定義し解決する行為は、個人的なものや政治的のを結びつけ、広範な政治的脈絡において個人の欲求不満や苦しみを再定義するのを促すものとなる (Ife 1997: 179-180)。

既存の社会的、経済的、政治的秩序を、社会正義の目標の達成に資するものに変換するには、オルタナティブの考えをはっきりと表明し、対抗する政策を発展、支持する (Ife 1997: 183) 実践が必要である。これは上述の Cambell and Baikie (2017: 74-5) のクリティカル・ソーシャルワークの原理の㉑㉒㉓㉔と関連する。

また上述の原理は、Ife (1997: 196) のマクロとミクロの実践の明快な区別をしない実践の組み立てとつながる。マクロとミクロの分離、ケースワークとコミュニティワークの分離は、ソーシャルワークの核心である個人的なものや政治的なものとの結びつきを弱めると考えられる。

Ife (1997: 180-1) は、現代の経済的、政治的環境において、周辺化された人々は、合法的、正当な発言権をもち、発言の価値が減じられている。経済的合理主義と管理経営主義が幅をきかせる社会で、力のある者と経済的に有利な者の発言のみが政策論議に影響を与える。周

辺化された人々には、貧困者、女性、障害者、ゲイ・レズビアン、子どもや高齢者、そしてアボリジニの人々があげられるが、日本では外国籍、民族、文化の異なる人々に置き換える。ソーシャルワーカーは社会的経済的目標について公的議論に参画し、不利な立場の人の声を聴かれるように届け、権力の談話に影響を与える (Ife 1997: 202-3) 実践が要請される。

**クリティカル・ソーシャルワークの実践** クリティカル・ソーシャルワークは、表面上、主流のソーシャルワークの仕事と似るが、同じ実践ではなく、仮定を異にする根本的な差異と理解される。クリティカル・ソーシャルワーカーは、ジェネラリストのスキルを用いるが、スキルはクリティカル・ソーシャルワークの仮定や価値に根差すことが要件になる。

Ife (1997: 180) によれば、実践のオルタナティブを発展させるときに、ソーシャルワークの伝統的強さが活用される。周辺化されたラディカルな実践を、ソーシャルワークの関心の中心に位置づけ直すというときの真意はまさにそこにある。ラディカルな実践は、主流のソーシャルワークの中心的なスキルを含み、ワーカーに新たなスキルの習得や、異なるやり方で仕事をするを求めめるものではない。

Ife (1997: 179-180) は、政治的あるいは構造的枠組みで理解される問題解決の視点は、「因習的」ケースワークには欠けるが、ケースワークは、「問題解決」のためにワーカーがとりうる最もラディカルな実践となると述べる。問題解決アプローチは、主流のソーシャルワークだが、そのスキルは異なる仕方、異なる理由、異なる脈絡で活用される。

もう一例は、「リフレーミング」である (Ife 1997: 179-180)。これもソーシャルワーク共通のスキルである。人々を固定し縛るのではなく、創造活動の可能性に開き、その人自身の経験に基づいて問題を再定義する能力である。それは再構築の対話に他者を招じ、個人的なものと政治的なものの結合の方法、ラディカルな実践、脱構築の形態と考えられる。

ラディカルな実践アプローチを主流のソーシャルワーク以外から探す必要はない。ソーシャルワークは、ラディカルな実践の伝統を築いてきたというのがIfe (1997: 180) の主張である。

## VII. まとめにかえて

本稿は、クリティカル・ソーシャルワークを始めるときに最初に疑問に思う問いに答えようと探索的に研究を

進めてきた。クリティカル・ソーシャルワークとこれまでの主流のソーシャルワークの違いは何であるのか。その違いの根拠となる知識はどのようなものであるか。ソーシャルワークのミッションに敵対する環境にあってソーシャルワーカーはどう実践するのか。ここまでクリティカル・ソーシャルワーク実践の理論の粗々のデッサンをしてきたところである。しかしまだ、クリティカル実践の可能性ある領域の具体性を明確に描くには至っていない。本稿のおわりに、クリティカル実践の理論的検討の意義についてふれ、今後の議論の継続に向けてのまとめとしたい。

ソーシャルワークは福祉国家の構造のなかに位置づけられてきたが、衰退の一途にある福祉国家の枠組みでは限界がある。ポスト福祉国家の脈絡で生ずる諸問題に取り組めるように、ソーシャルワークを再定義、再構築をすることが課題である (Ife 1997: 186)。特に、ヒューマン・サービスの供給の基盤として、コミュニティの可能性の議論が重視される (Ife 1997: 188)。地域社会の崩壊の一方で、地域の人々による新たなつながりが築かれている。専門職だけでなく、地域の人々やグループと協働するフォーマル・サービスとインフォーマル・ケアの組み合わせが模索される。

ソーシャルワーカーが、抑圧された人々とつながりを持ち、抑圧された人々の集団に属し、彼らの社会的アイデンティティに同一化しながら実践する。行動しながら生まれる考えを発展させ、理論と実践をつなぎ、世界を理解し、変えていくために行動する。

クリティカル実践の理論的検討は、日本の国家資格である社会福祉士養成課程におけるソーシャルワーク教育や実践の閉塞感と限界を打破する重要な視点・論点を与える。Ife (1997: 207) のいう基本的な希望の源泉である人間性のビジョンは、社会正義や人権の原理と、より良い世界を追求する人間の精神から成る。ソーシャルワークの担い手たちが、経済合理主義や経営管理主義との闘いやポストモダンの攻撃に負けてしまわないよう、豊かな人間性を鍛える教育が求められる。

### 付記

本研究は JSPS 科研費 23530734 の助成を受けたものである。

### 文献

- Alway, J. (1995) *Critical Theory and Political Possibilities: Conceptions of Emancipatory Politics in the Works of Horkheimer, Adorno, Marcuse, and Habermas*, Greenwood Press.
- 阿部彩 (2008) 『子どもの貧困—日本の不公平を考える』岩波新書
- Baines, D., eds (2007) *Doing Anti-Oppressive Practice: Building Transformative Politicized Social Work*, Fernwood Publishing.

- Briskman, L., Pease, B. and Allan, J. (2009) 'Introducing critical theories for social work in a neo-liberal context', in *Critical social work, theories and practice for a socially just world*, second edition, eds J. Allan, L. Briskman and B. Pease, Allen & Unwin, 3–14.
- Cambell, C. and Baikie, G. (2012) 'Beginning at the Beginning: An Exploration of Critical Social Work', *Critical Social Work*, 13 (1), 67–81, (<http://www.uwindsor.ca/criticalsocialwork/>)
- Davies, L. and Leonard, P., eds (2004) *Social Work in a Corporate Era: Practice of power and resistance*, Ashgate.
- Ferguson, I. (2008) *Reclaiming Social Work: Challenging Neo-liberalism and Promoting Social Justice*, Sage Publications.
- Fook, J. (2002) *Social Work: Critical Theory and Practice*, Sage Publications.
- Freire, P. (1970) *Pedagogia do Oprimido*, Charles E. Tuttle Co., (=1979, 1988 小沢有作ら訳、『被抑圧者の教育学』亜紀書房)
- Healy, K. (2005) *Social Work Theories in Context: Creating Frameworks for Practice*, Palgrave.
- Healy, K. (2005) 'Under reconstruction: renewing critical social work practices', in *Social Work: A critical turn*, eds S. Hick, J. Fook and R. Pozzuto, Thompson, 219–230.
- Hick, S. and Pozzuto, R. (2005) 'Introduction Towards "Becoming" a Critical Social Worker', in *Social Work: A critical turn*, eds S. Hick, J. Fook and R. Pozzuto, Thompson, ix–xviii.
- Howe, D. (1987) *An Introduction to Social Work Theory*, Wildwood House.
- Ife, J. (1997) *Rethinking Social Work: Towards critical practice*, Longman.
- Ife, J. (2008) *Human Rights and Social Work: Towards Rights-Based Practice*, Cambridge.
- McDonald, C. (2006) *Challenging Social Work: The Context of practice*, Palgrave Macmillan.
- Mullaly, B. (2007) *Structural Social Work: Ideology, Theory, and Practice, second edition*, Oxford University Press.
- 大沢真理 (2007) 『現代日本の生活保障システム：座標とゆくえ』岩波書店
- Payne, M. (1997) *Modern Social Work Theory, second edition*, Palgrave.
- Pease, B. and Fook, J., eds (1999) *Transforming Social Work Practice: Postmodern critical perspectives*, Routledge.
- Thompson, N. (2006) *Anti-discriminatory practice, fourth edition*, Palgrave.
- Rossiter, A. (1996) 'A Perspective on Critical Social Work', *Journal of Progressive Human Services*, Vol. 7 (2), 23–41.
- Whittington, C. and Ray, H. (1985) 'A framework for theory in social work', *Issues in Social Work Education*, 5 (1), 25–50.

---

## Outline of a Theory of Critical Social Work

TAGAWA Kayoko

Critical social work has been formed and has developed in Canada, Australia, and Britain. This paper is exploratively investigated centering on the written literature of critical social work.

How does a critical social work differ from a traditional social work?

How do the differences between them appear in practice?

How are the missions of critical social work realized in a hostile context of social work?

A sketch is tried for a theory of critical social work, finding out the answers to the questions over a critical social work. It becomes a subject of this paper to draw the outline of a theory of critical practice.